HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「記憶地図」を用いた奥尻島「賽の河原祭」の可視化と知識変換
著者	手塚，薫；TEZUKA，Kaoru
引用	北海学園大学人文論集(70)：25-46
発行日	2021-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

「記憶地図」を用いた奥尻島「賽の河原祭」の可視化と知識変換

手　塚　　薫

1．研究の背景と目的

1-1. 研究の背景

筆者は本学の学芸員課程教育を担当し，毎年学生を引率して奥尻島の町内施設を宿泊場所としながら，島内各地の歴史・文化，環境，年中行事，祭祀等をテーマに研修を実施している。2018 年と 2019 年の 6 月には道南地方で古くから実施されている民俗祭祀である「賽の河原祭」に参加し，その進行を見守るとともに関係者に取材を行った。

奥尻島北端の奥尻郡奥尻町稲穂岬では，道南 5 霊場として著名な「賽の河原」が存在する。海上交通の難所として古くから水難事故が多く，また戦時中は機雷が漂着し，人身事故もたびたび発生したという（図 1 黒枠）。

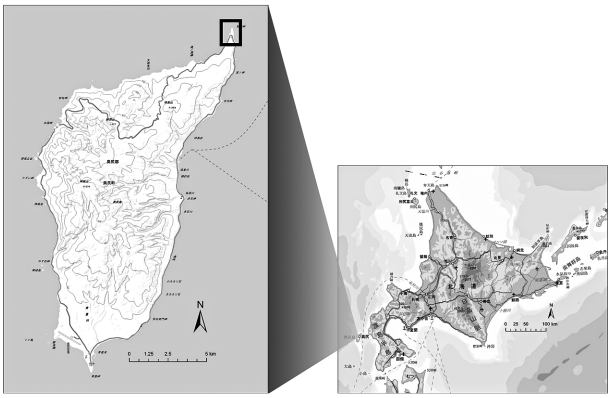

図 1　奥尻島と稲穂岬

そうした水難犠牲者の慰霊地として 1887（明治 20）年 8 月に地蔵堂（堂宇）が建立され，地蔵尊像が安置され，島内から住職が呼ばれ供養するようになった（奥尻町役場 2003：458)。毎年 6 月 22 日と 23 日に法要が営まれている。北海道の移住者が構築した民俗表象としては古く，人気もあり，海岸が大小無数の石塔で埋めつくされていることから，場所が有する独特の景観や雰囲気との関連で表現されることも多い。いわば郷土の無形民俗文化遺産となっている。

現象学的地理学の理解からは，場所とそこに住む人との結びつきを固有のものとするトゥアンやレルフの立場がある（トゥアン 1993，レルフ 1999)。賽の河原祭のように，聖なる場所と世俗的な場所に分節化され，土地全体が文化的に再定義されるような事例においても，場所をめぐる意味がまったく不変であったわけではない。海難犠牲者のみならず，幼少死亡者や水子供養のための慰霊の場でもあり，法要以外にも島内の人々が楽しめる余興（協賛行事）の場にもなり，特に成人前の死者の慰霊場として機能してきた。1993 年の北海道南西沖地震では，稲穂地区にも大きな被害が及んだが，その後震災からの復興も果たしている。自然災害で亡くなった人を慰霊する場として慰霊碑が，御堂のすぐわきに建立された（図 4 【北海道南西沖地震の慰霊碑】)。

近代以降の慰霊祭や追悼式という社会行事は，「よりよき生」を未来に築くための「犠牲」として「不条理な死」を受け入れ可能なものとして処理する装置として働いてきた（福田 2012：77)。こうした祭儀成立の背景だけではなく，平時から毎年繰り返されてきた社会行事が，その後に生じた自然災害に遭遇した人々や社会に対し，非日常性からの脱却と日常性への回帰を促すという実践的な役割も担っている。賽の河原祭が，地蔵を中心とした祭祀の場に様々な意味を添加してきたことが理解できる。郷土における無形民俗文化遺産の成立と継承の点においても，震災復興を経験した行事としてもユニークな位置を占めている。本稿は，賽の河原祭の固定的・本質主義的な場所理解を志向するものではなく，むしろ場所・人・記憶の相互作用を経て，賽の河原祭の意義もつねに構築され続けていること

に関心を寄せていることを明らかにしておきたい。

1-2. 研究の目的

賽の河原祭に参加する地域住民の記憶と伝聞，つまりオーラルヒストリー（口承記録）を位置情報と結びつけて地図に表示し可視化する「記憶地図」の作成を通し，地域住民が毎年おなじ時期に開催している民俗祭祀が，周辺の景観・場所とどのように関わり，意味づけられてきたのかを視覚的に把握することを目的とする。通常こうした記録は一過性のものであり，書き言葉によって伝承されるものにはなっていない。知識の多くは無意識的なもので明瞭に言語化されて整理されているわけではない（レルフ 1999：37）。主観的・身体的な非言語・非形式的な知識は「暗黙知」と呼ばれ，客観的・論理的で言語的・普遍的な「形式知」に変換する活動が知識創造の鍵を握っているとされる（野中・竹内 2020：98-114）。知識の共有・活用には形式知が有用だが，その背後に暗黙知がなければ知識自体の価値が損なわれるため，暗黙知と形式知の循環的プロセスが知識創造に不可欠である（野中・紺野 1999：110）。

この暗黙知は，近年民俗芸能の継承にも認知されるようになった在来知とも共通点がある。橋本は，人々が自然環境や社会環境に日々関わる過程で形成される実践的な知を在来知として定義している（橋本 2015：74）。これらは舞や笛・太鼓の扱い等の技能であり，多くの場合は文字化されていない。それらの所作，振る舞いを見聞きした人々の記憶によって継承されてきた。祭に関わるさまざまな個人的・組織的な実践の多くは言葉や文字にならない暗黙知／在来知のレベルの営みであり，文字化されることを通じて自己が認識され，意識化され，外在化されて形式知に変換される。暗黙知・在来知と形式知の間の創発的な循環を果たすことがアーカイブの役割とされる（高山 2008：44-45）。「記憶地図」の作成はまさにその過程を表している。アーカイブは個々人のライフ（人生）を規格化するデータベースによる統治であり，人間を番号化し，モノ化することで統治する思考として批判的な立場がある（田中 2018：427-428）。しかし，アーカイブには

記録の管理を通じ，上からの「統治」という次元と人間の無意識の振る舞いや語りの中から夢が生まれる「生成」という次元がある（吉見 2017：12）のであって，「記憶地図」の場合はむしろ後者に軸足を置いている。

本稿では上記の視点に立って，地域社会のメンバーが持っている知識の一端を「記憶地図」に統合することを企図している。「記憶地図」とは，GIS を用いて証言と位置情報を結びつけて地図上に表示するものであり，これまで量的な情報として取り扱うことが難しかった祭礼ルートの詳細な復元や個人が有する記憶などを統合して共有する手法であり，すでにそうした意欲的な成果が発表されている（板谷ら 2015，板谷ら 2017，河角ら 2017，佐々木ら 2019，蟬塚ら 2019，谷端ら 2018，矢野ら 2017）。特に意識的に記録に残されないために，祭行事ごとに消えてしまう人々の多様な振る舞いを可視化し，人々と景観との関わりや意味について考察することができる。地域再生の原動力としての祭礼や民俗芸能の持つ力が注目されている今日，文化面の復興・継承に「記憶地図」は有用であると期待されており，本稿でも「記憶地図」の利点を活用する。

奥尻では 1993 年の北海道南西沖地震から 28 年が経過しようとしている。発災から本格復興期を経験し，次の災害に備える防災期に差しかかっている（佐々木ら 2019：46）。現在も島の人口減少に歯止めがかかっておらず，過疎化は続いている。震災からの復興過程が注目されるが，現代における当該地域の社会や文化の推移に対応して，「賽の河原祭」のような地元で維持されてきた祭祀がどのように対応しているかをアーカイブすることは重要である。

災害は以前からあった地域社会が直面していた課題，たとえば，少子高齢化や人口流失にともなう担い手不足などを明るみに出すという特性がある。そうであれば，郷土芸能の断絶の危機は自然災害による直接的な被害のみならず，災害以前から続く地域社会を取り巻く社会環境の変化によっても多大な影響を受けていることを想定できる。

2018 年と 2019 年の 2 年にわたり「賽の河原祭」に参加できたことから，両年の個人や集団に内在した行為を「記憶地図」によって客体化・外部化

することを主たる目的とする。そのうえで，その中になんからかの相違が見られるとすれば，それはいかなる要因によって生じているものかを推察しようと思う。

2．調査対象地と調査方法

2-1. 調査対象地

今回調査の対象とする稲穂地区は島の北端に位置している。海岸段丘が海に迫り，海岸沿いに道路が走り，適当な入江がない磯浜から形成されており，北にせり出した稲穂岬を中心に東に勘太浜，西に稲穂，海栗前（野名前）の 3 集落からなる（図 2）。ほぼ一列に並んだ典型的な街村を形成しており，1970 年には 93 戸 424 人が暮らし，主な生業は漁業であり，イカ漁を主体にホッケ刺網，マス延縄，ノリ採集などを行っている（藤岡・浮田編 1975：141-142）。3 集落は船揚場か漁港を有し，住民の多くは漁業と水産加工業に就いている。かつては夏季には米作りもしており，よくとれたという証言もあった。農耕馬も飼っていた。1959 年にこうした農耕馬が，ばん馬競走に登場している写真がある（図 3 【ばん馬競走】）

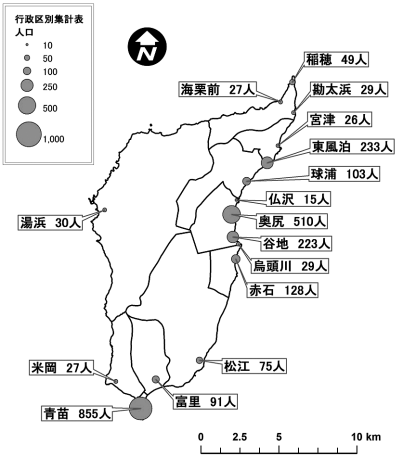

図 2　奥尻島の集落と人口

図 3　賽の河原祭 2018

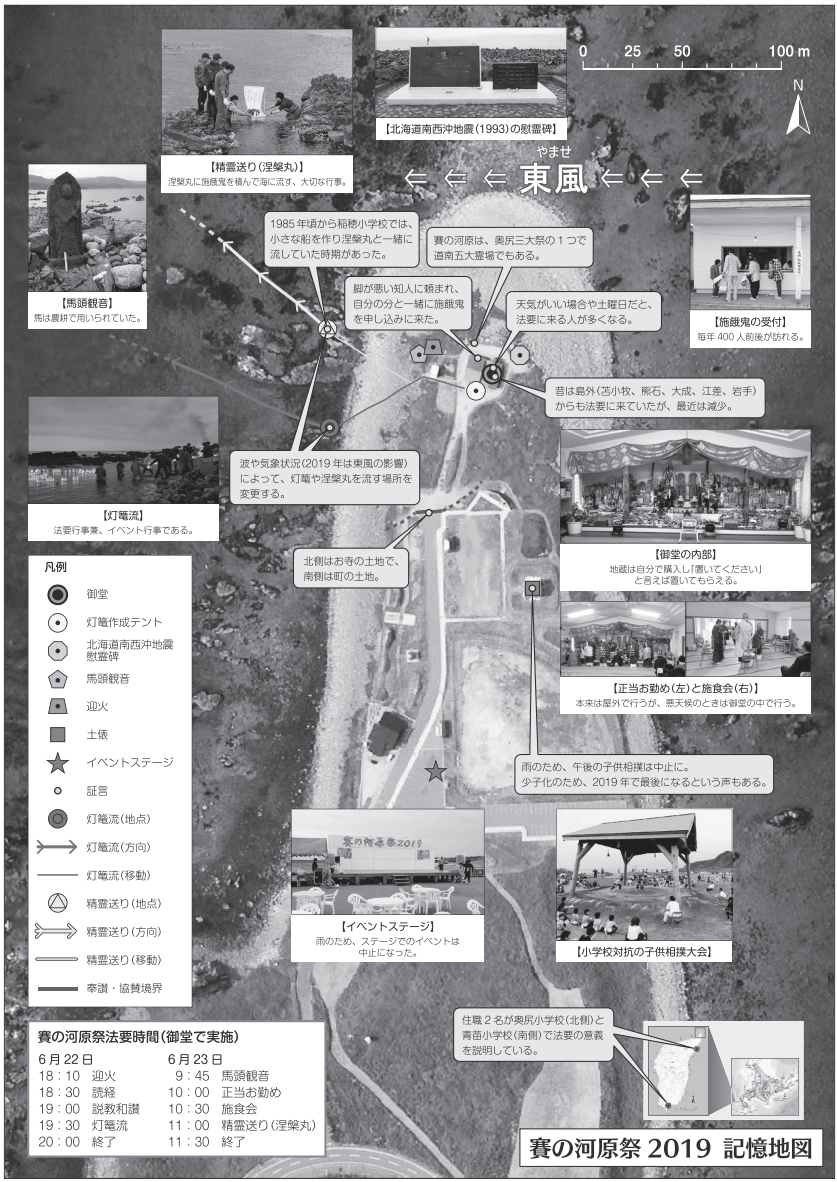

図 4　賽の河原祭 2019

人口減少は島内全域で顕在化しているが，2019 年時点で稲穂 27 世帯 49 人，勘太浜 16 世帯 29 人，海栗前 14 世帯 27 人となっている（図 2）。1975 年との対比で世帯数では 40％減少，人口では 75％の減少となっており，人口減少はここでも見られる。

稲穂岬周辺は暗礁が多く船の事故が絶えなかったことから，稲穂岬灯台は 1891 年 12 月 1 日に点灯され，桧山管内では江差町の鴎島灯台に次ぐ古い歴史を誇っている（図 3 【灯台】）。現灯台は 3 代目のもので，2 代目は 1993 年に発生した北海道南西沖地震で倒壊した。稲穂岬一帯の約 6 ヘクタールにわたり数万もの大小の石を積み上げた石塔が広がっている（図 3 【積み石エリア】）。1993 年 7 月 12 日に発生した北海道南西沖地震で生じた波高 8 m の津波は，賽の河原付近を直撃し，入り口から北方に伸びる稲穂岬の東西両海岸の石塔の多くを倒し，あたりの景観は一変したが，その後再建された。御堂は半壊し，休憩所，売店，食堂も使用不能となった。稲穂小学校も破損し，死者 13 名，行方不明者 3 名，全半壊個数 59 戸であった（奥尻町 1996：211）。この地域一帯は盛り土され，稲穂小学校の新校舎が落成し，1994 年 4 月に再開にこぎつけた。このころ生徒数は 10 人前後だったという。2003 年 4 月に宮津小学校と統合したため，この校舎は島の民俗や歴史を展示する歴史民俗資料展示室として使用されている。

北海道南西沖地震後は，炊事場やトイレが設置されキャンプ場として整備され，夏季には売店兼食堂が営業し，観光客やライダーが訪れるスポットとなっている。

2-2. 調査方法

2018 年と 2019 年の 2 年にわたり，学生とともに現地を訪問し，奉讃会の会長・役員 5 名への聞き取りを中心に，奉讃行事（法要）と協賛行事（イベント）双方の行事を見守った。2019 年の 7 月には祭事の準備（団子作り）について聞き取りを実施した。奉讃行事に関しては受付や灯篭の製作などを実際に手伝うという参与観察を心掛けながら関係者に取材を行った。参加学生については 2018 年が 3 名，2019 年が 3 名であった。

岬の北端に所在する御堂では奉讃行事が実施され，御堂と連結する家屋で受付や準備が行われる（図３・４【御堂】）。両日ともに島内６寺の住職が地蔵尊像前で読経するために集まるので，学生と共に取材も行った。

協賛行事としては以下のような催しがある。岬の中央部には 1997 年に作られた屋根つきの土俵があり，小学校対抗の子供相撲大会が開催される（図４【土俵，子供相撲大会】）。保護者や教員など関係者も集まり，取材や撮影も行った。土俵の南隣にグランドがあり，その一角に特設ステージが設置され，ここで日中は，ホタテ貝やカキ殻を積み上げる競技や子供ビンゴ，中高生によるブラスバンド演奏があり，夕方以降は大人を中心にカラオケなど娯楽性の高いイベントが組まれており，島民も多数参加するため，その様子も取材した（図３【ステージでのブラスバンド演奏】）。しかし 2019 年は雨のためにステージ上でのイベントは中止になった。

調査終了後にデータを持ち帰り，大学の研究室で GIS を用いて記憶地図を作成した。

３．賽の河原祭の概要と実施状況

3-1. 賽の河原祭の概要

低平な河原で，賽の河原の入り口から南北に細長く突出し，東西を海に囲まれた稲穂岬という独特な地形と結びついた特異な行事は，1887 年ごろから始まり，以前は地元の人に「賽の河原お参り」と称され個人的な催しであったが，1975 年ごろから町役場が参入して大規模・観光化し，現在は「賽の河原祭」と呼ばれるようになっている（図３【賽の河原入り口】）。島民は車でここを通るときに，路上から地蔵堂の方に合掌していたとの記述が残る（諏訪 1986：45）

住職が読経を行う御堂内部には地蔵尊が 100 体以上安置されている（図４【御堂の内部】）。とりわけ御堂中央部を占める一対二体の地蔵尊は霧で方向を見失い遭難しかかった船の前に現れ，進路を指し示したという伝承を有するものである。

道民の間で古くから周知されていたことは昭和初期の投票の記録からもうかがえる。1933（昭和 8）年に『函館毎日新聞』が「道南五霊場」の選定を投票によって実施した。その結果，最多得票数（448,424 票）を集めたのは「太田山権現」（せたな町）であり，第 2 位（326,978 票）が「賽の河原」であったことから，このころには道民に広く周知されていた。この霊場選定の目的は「体制宗教」の推進体である寺院や神社の神秘的な加護と霊験を当時の民衆に喚起することにあったとされている（佐々木 2004：589）。

賽の河原祭（6 月開催）は，室津祭（7 月開催），なべつる祭（8 月開催）と共に奥尻町を代表する 3 大祭の 1 つであり，島民と観光客向けにイベント化された祭となっている。ただし賽の河原祭は法要や供養のための行事，いわゆる奉讃行事と，余興を中心に構成されている協賛行事に，稲穂岬の南北で 2 分されていることが特徴である。

賽の河原の奉讃行事では，6 人の宗派も異なる島内各寺の住職が集まり，協働で奉讃会の行事を執り行っている。現在それらは，乾清寺（曹洞宗），順行寺（浄土真宗大谷派），円満寺（浄土真宗本願寺派），日潮寺（日蓮宗），法隆寺（浄土真宗大谷派），耕養寺（曹洞宗）である。島内を代表する仏事では，宗派の異なった各寺院が大正末期から相互に協力しあうという形態が見られるのが奥尻島の特徴となっている（新井 1970：87）。

今回の調査では，1967 年には字青苗に所在した万徳寺（浄土真宗本願寺派）からの住職の参加は確認できなかった。「導師」と呼ばれる 6 人の住職を代表する立場であるのが，島内最古で 1851（嘉衛 4）年創建の寺院乾清寺の住職で，最初にお経を読み上げ，その後にそのほかの住職も追従して読経するという流れになっている。

奉讃行事（法要）は寺社の祭礼とは異なり，字稲穂在住の地域住民（海栗前，稲穂，勘太浜）が交代で実施主体となり，準備から運営までを取り仕切る。奉讃会の役員は会長を含め 6 人で，会長以外は毎年交替する。迎火（むかえび）や灯篭流，小型の木造船を海に流す精霊送りを主催する。2018 年は勘太浜，2019 年は海栗浜，2020 年は稲穂が担当するといった輪

番制をしいている。

一方の余興的なイベントは 1975 年ごろ始まり，現在見られるような役場職員と町民から成る協賛行事の実行委員会が運営するにぎやかな協賛行事となっている。相撲大会は，もともとは稲穂の学校の運動会であり，その後青年団の相撲大会に変化し，1980 年ごろに学校対抗の子供の相撲大会になったという。子供相撲大会は生徒と教員，および保護者やその他の見物人も多く参観する習わしとなっている。しかし少子化の影響で存続を危ぶむ声も関係者の間でささやかれている。

協賛行事が盛り上がりすぎると法要の進行に支障をきたすことを懸念して，奉讃会側が申し入れを行ったことがあるという。また奉讃会の役員が協賛行事を参観することもまたその逆も認められなかった。

3-2. 2018 年と 2019 年の実施状況

法要に先立って各家から 1 名が参加し準備を進める。人口が減少しているせいもあって準備が早まっているという。2018 年の場合，主婦たちは 6 月 19 日から御堂の清掃と買い物を済ませた。20 日と 21 日には自治会館で 12 人の女性がお供えの団子を約 1000 個作るのが一番大変な作業であるという。昔は上新粉を使ったが今はべこ餅の粉（白玉粉のことだと思われる）を使う。6 月 22 日と 23 日の両日には女性たちは御堂わきの家屋で住職たちに提供する食事の支度も行う。

6 月 22 日午前には御堂わきの家屋で「志納・施餓鬼受付」の窓口が設けられ，役員の内 5 人が約 400 人の島内各地からの参拝客の対応をする（図 4【施餓鬼の受付】）。1979 年ごろには北海道本島からバス 3 台が来るなど多くの人が訪れ，御堂に宿泊したこともあったというが，最近は訪問客も少なくなっているという。高齢化のために脚が弱り，知人に頼むケースもある。北海道南西沖地震で大きな被害を出した青苗地区とその周辺からは全体の 3 分の 1 に相当する人が供養のために訪れる。震災以前から訪れている人が多いようだが，震災後は震災による慰霊の気持ちも込められている（蟬塚ら 2019：169）。遠方からということもあり，子供相撲大会を見て

からお参りすることが多いという証言があった。

「志納・施餓鬼受付」では，施餓鬼（経木）を目的に参拝する人は，施主の名を記名し，支払いを済ませる。お供えの花を持参する人が多い。施餓鬼はお経をあげてもらってから 23 日に涅槃丸で供物とともに海に流す。施餓鬼の内訳は，先祖供養 350 本で，他に水子供養が 150 本ほどで，計約 500 本であるという。2019 年は雨模様ということもあってか，施餓鬼数では 310 本であった。金額設定がない志納であるが，志納料で多いのは 1 件 2 千円である。涅槃丸は全長約 2 m の帆のついた木造船のミニチュアのことで毎年大工が制作している（図 3 【涅槃丸】）。白い帆の内側には墨で「六つの道　遠近迷ふ輩は　吾が父ぞかし　吾が母ぞかし」と書かれていた（両年とも）。

午前 8 時からは家屋の南に設置されたテント内で役員以外の有志数名が灯篭を制作する（図 3 【テント内での灯篭作成風景】）。完成品をテント横の受付で購入する。1 個の値段は 500 円である。2018 年は 350 個の売り上げであった。年々減ってきているという。22 日夜の最大の見どころは灯篭流であり，灯篭に灯をともして海に流す。2003 年に閉校した稲穂小学校の生徒も 1979 年ごろから少なくても 1985 年までの期間に一回り小型の船を造り，涅槃丸と一緒に流していたこともあった。卒塔婆は，全長約 335 cm，各辺の幅 16.5 cm の角柱状で毎年新調し，導師が 4 面に墨書して御堂前の海を見渡せる場所に歴代の卒塔婆と並べて建てる。たとえば 2019 年の一面にはこう書かれていた（図 3 【卒塔婆】）。

妙観察智　維時　令和元年　六月二三日　施主　賽ノ河原奉讃会　建之

2019 年には新設された 1 本を含め 11 本の卒塔婆が林立していた。古い卒塔婆が倒れると，迎火で燃やす（図 3 ・ 4 【迎火】）。迎火には，冷たい海で亡くなった亡霊を暖めるという意味が込められている。

22 日の夜には迎火が起こされ，御堂内で島内各寺から集まった住職らによる読経が始まる。つづいて説教和讃が始まり，参列者に経本が配布される。賽の河原の由来を説明した「賽の河原地蔵和讃」を導師が一人で読み上げる行事である。その後一同は御堂の裏に回り，申し込んでおいた灯篭

を受け取り，住職を先頭に灯篭を持った一団が徒歩で岬中央の東海岸まで行進し，そこから灯篭を流す（図３・４【灯篭流】）。2017 年から青苗小学校と奥尻小学校の生徒が灯篭を制作し，約 100 個を一緒に海に流す。夜の海流に乗って進む灯篭を見るのは壮観で，観光客もこのシーンを目当てにしている。

灯篭流が終わるとこの日のスケジュールは終了となる。参加者は，そのまま特設のイベントステージに移動し，カラオケや有料ビンゴ大会に参加し，にぎやかなひと時を過ごす。しかし，2019 年は昼ごろから雨脚が強くなったために，午前の子供相撲大会が開催されただけで，後の催しはすべて中止となった（図４【イベントステージ】）。

６月 23 日は法事のみ（奉讃行事）が営まれ，馬頭観音石仏の前で２人の住職がお経を唱える（図４【馬頭観音】）。2018 年は午前 10 時過ぎであったが，2019 年は少し早い９時 45 分に始まった。馬頭観音は島の交通・運搬・農耕を支えた馬の守護仏に結びついた民間信仰としてお参りにやってくる人が少ないながらいる。

午前 10 時代に入って正当お勤めが，御堂中央の一対二体の地蔵尊に６人の住職が対座して 30 分ほど行われる（図４【正当お勤め】）。2019 年は御堂内にいた参列者は筆者と学生を除き 16 人でそのうち女性が 13 人であった。圧倒的に女性が多い理由を地元の方に聞くと，賽の河原祭は６月 22 日と 23 日に固定されているため，仕事で来られないからではないかとのことであった。また，訪問理由で最多だったのは，先祖供養であり，次いで先祖供養と北海道南西沖地震の犠牲者を悼む機会としている人が多い。

正当お勤め時に参列者の間を香炉が回り焼香をする。その後，向きを海に変えて祭壇をしつらえ，午前 11 時ごろから施食会が始まる（図４【施食会】）。先祖，祀り手のない仏，無縁の仏，その他全ての精霊に対し供養を行う法事である。僧侶の間で循環させながら過去帳と施餓鬼（経木）一本ずつにお経をあげていく。正当お勤めも施食会も天気が良好で風が弱ければ御堂の外で行われる。

その後，施餓鬼（経木）と菓子，団子，花，野菜などの供物を満載した涅槃丸を，男たち 4 人が担いで西海岸におり，海に流し，沖合まで出ていくのを見守る「精霊送り」ですべての法要は幕を閉じる（図 3 ・ 4 【精霊送り（涅槃丸)】)。

4．賽の河原祭の時空間的意義と祭の変化

4-1. 賽の河原祭の時空間的意義

時系列的に見ると，個人的な慰霊の行為からはじまった稲穂岬での土着の民俗祭祀はやがて定例化し，霊場として不動の地位を獲得する。1975 年ごろからは行政が介在し，奥尻 3 大祭の場として島の内外に周知し，観光化されたイベントとしての性格も付加される。1993 年の北海道南西沖地震はそこに自然災害による慰霊の意味が加わった。奥尻島観光協会が賽の河原祭を，だれでも自由に参加できる「法要・供養の行事と子供相撲とその他協賛行事」と位置付けて HP で広報していることでもわかるように，両者を不可分とした一体的な行事となっている。

一方，場所・空間の観点からは今回制作した「記憶地図」により，稲穂岬の南北で祭事と法要を明確に区分した祭祀空間を描くことができる。すなわち南部はイベント化された後から付け加わった娯楽の場所であり，北部は明治期から継続する霊場としての機能を有している。一見 2 つの行事が結合し一体化して開催されているように見えるが，同一人物の両行事への参加は限定されており，「奉讃・協賛境界」を境にした聖俗 2 分というダイコトミー属性が特徴的である（図 4 【奉讃・協賛境界】)。この境界より北側は寺の敷地で南側は町の土地である。奉讃行事は聖なる祭祀場で，協賛行事は土俵，特設ステージ，売店兼食堂付近という世俗的な場で行われ，両者は別個に行われており，互いに干渉しないが，22 日の夜のみ奉讃会と協賛会の両グループ合同で灯篭流を主催する。灯篭流の際，住職を先頭にこの象徴的な「奉讃・協賛境界」を踏み超えて徒歩で南下し，岬中央の東海岸部から灯篭を海に流す（図 3 【灯篭流】)。海に灯篭が映え，見物客も

多い。

また，単なる観光イベント化された行事ではなく，信仰上の意義を伝えるために曹洞宗の 2 人の住職が，2007 年から青苗小学校（島の南側）と奥尻小学校（島の北側）に出向き，灯篭制作を通じ，灯篭流と法要の意義を分かりやすく説明することが行われている（図 5 ）。

4-2. 賽の河原祭の変化

上記の祭に関し，奉讃行事と協賛行事の双方について当てはまることだが，あらかじめ定められ，参加者に示されたスケジュールに従って粛々と進行するため，大きな変化は予測していなかった。しかし，2019 年は昼過ぎから雨天のため，「子供相撲大会」は途中で中止され，そこから後の午後のイベントスケジュールは取り止めとなった。一方，夜のメインイベントである灯篭流は実行されたものの，2018 年とは大いに趣が異なったものになった。通常は 19：30 ごろ開始される「灯篭流」では，灯篭が海流に乗る時間が一番長く楽しめる理想的な地点である稲穂岬の中央部東海岸で灯篭を海に流す。そうすることで，北上する海流に乗って灯篭が流れる幻想的な光景が眼前で長時間持続する（図 3 【灯篭流（地点・方向・移動)】)。ところが，2019 年は東風（やませ）の影響で，東から西に強い海流が流れていたため，灯篭を流す地点を岬の西北海岸に変更した。そのため，灯篭がすぐに離岸し，西の沖合にむかってしまい，想定したほど長い時間灯篭を目で追えるような効果や臨場感は得られなかった（図 4 【灯篭流（地点・方向・移動)】)。一方で，翌日 11 時ごろまでに実施した「精霊送り（涅槃丸)」も前年の 2018 年よりは，南西の位置から船を流していた（図 4 【精

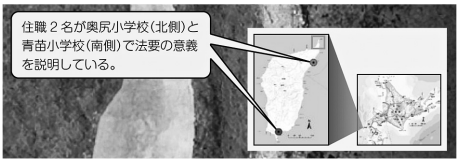

図 5　住職による 2 小学校での講座

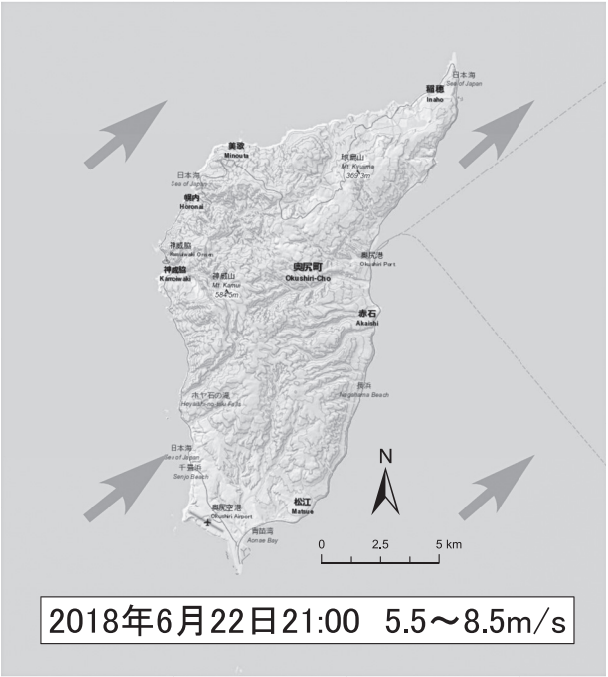

図 6　風向風速

霊送り（地点・方向・移動）】）。船のバランスをとるのは難しく，供物の配置にも細やかな気を遣うものであるが，すぐに転覆しないようにその時々の判断で慎重に投入地点を決めたためである。

GIS ソフトでは，ラスター形式のデータを使って風のベクトル図（風向風速）を作成することができる（木村 2019：166-169）。ここではヨーロッパ中期予報センター（ECMWF）が無償で提供しているラスターデータを使って，2018 年と 2019 年の両年における「灯篭流」（6 月 22 日夜実施）と「精霊送り（涅槃丸）」（6 月 23 日午前中に実施）に一番近い時間帯のベクトル図を示す（図 6 ～ 9 ）。筆者の目視では，2018 年には，海流は北向きに動き，2019 年には海流は西向きに動いていたが，気象データ上の当時の風向風速と矛盾がないことが判明した。関係者に確認すると，これまでにも波が荒れている場合に数日間，灯篭流と精霊送り（涅槃丸）が延期される

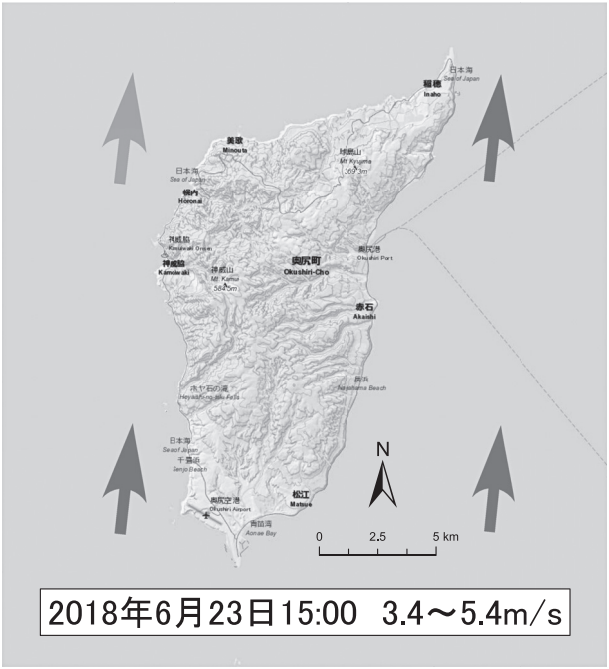

図7　風向風速

こともあったという。イベント的な景観への配慮にとどまらずに，遠方（彼岸）まで灯篭や施餓鬼を見送りたいという精神性を垣間見ることができる。

上述した変化に端的に表れているように，祭にかかわるその時々の臨機応変な判断と行動は暗黙知の領域で駆動され，その時その場で真価を発揮する知識であるが，体系的・論理的に処理して伝承していくことは難しい。つまり，秩序だった過去の知として時系列上に位置付けられてはいない。暗黙知は特定の業務の中で伝授されるというよりは，周囲の人の行動から類推したり，経験から自分で発見したりして獲得されるものである（金井・楠見 2012：13）。

個人や組織に内在している暗黙知を，今回作成を試みた「記憶地図」というメディアによっていったん外在化・対象化し，自己から切り離された客体として設定し，客観的・言語的・論理的な形式知に変換することで，

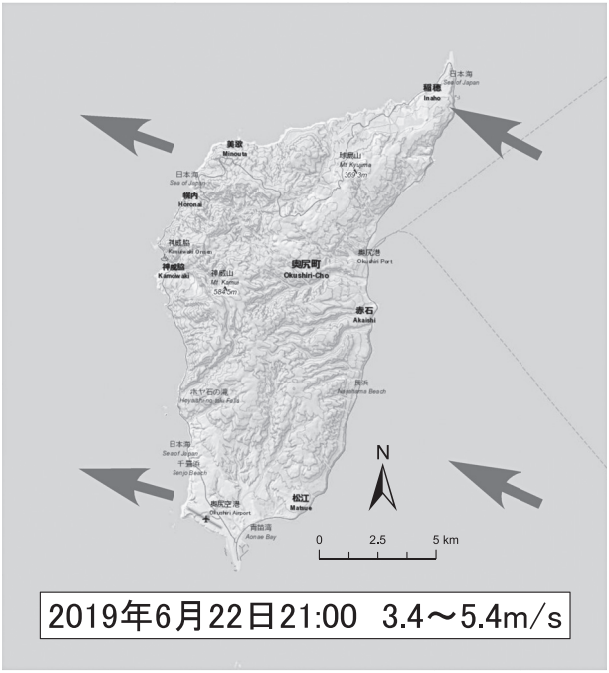

図 8　風向風速

自分たちがこれまでなんとなく行ってきた営みの意味を意識し，自覚的に行動することができると考えられる。地域住民が依拠した文化社会的な枠組みを，あえて外部の人々と共有してみる価値はあろう。そのうえで，地域社会で長年継承されている郷土の民俗的営為を振り返り，それを再び主観的・身体的で非言語的な暗黙知に還流させることが求められる。それでは，そのことに果たしてどのような意義があるのだろうか。暗黙知と形式知の絶え間のない循環により，今後来るべき災害や人口流失，少子高齢化といった自然・社会環境へのレジリエントで実践的な対応力を向上させる可能性があることを現時点では指摘しておく。今後も賽の河原祭の経年変化をアーカイブする作業を継続し，知識変換の実践面に注目していきたい。

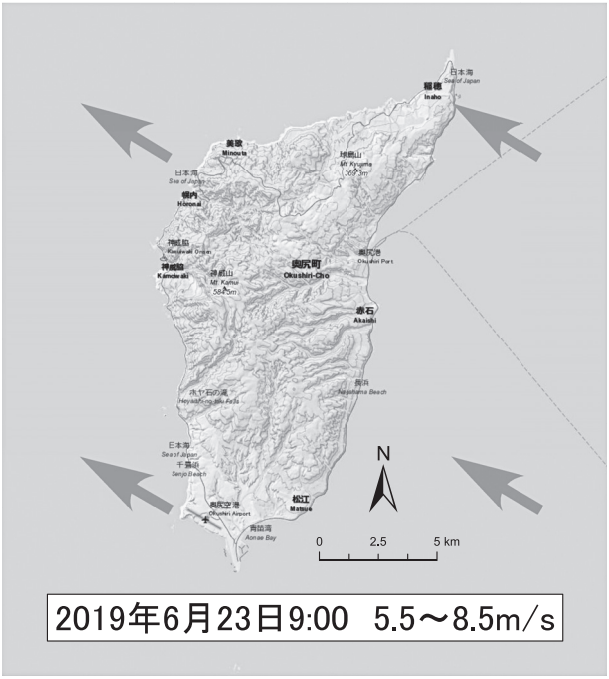

図 9　風向風速

謝　辞

調査活動時に我々を快く受け入れ，ご協力くださった「賽の河原奉讃会」の皆様と奥尻町教育委員会事務局学芸員の稲垣森太氏に心よりお礼申しあげたい。調査期間中行動を共にし，法要を手伝った 4 人の学生，鬼頭沙弥さん，蟬塚咲衣さん，竹内智樹さん，藤田翔さんにはこの場を借りて感謝したい。また，蟬塚さんには，GIS ソフトを使った「記憶地図」と風ベクトル図の作成でも協力していただいた。ここに記して感謝の意を表する次第である。

なお，本研究では以下の 3 つの研究費の一部を使用している。

①2019 年度北海学園学術研究助成

②2020 年度科学研究費【基盤研究（A）】「北米アラスカ・北西海岸地域にお

ける先住民文化の生成と現状，未来に関する比較研究」(課題番号：19H0056501，代表：岸上伸啓)
③2020 年度科学研究費【基盤研究(C)】「博物館資料の収集と利活用を促進させるサイクルの構築」(課題番号：18K0110902，代表：栗原憲一)

引用文献

新井福之助
1970『奥尻島自然・人文調査の記録』奥尻島総合調査隊一同，東京.
板谷直子（牛谷直子），中谷友樹，前田一馬，谷端　郷，平岡善浩
2015「「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題―宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として―」『歴史都市防災論文集』9：73-80.
板谷直子（牛谷直子），谷端　郷，中谷友樹
2017「「記憶地図」を用いた無形の文化遺産の再生―宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として―」『歴史都市防災論文集』11：223-230.
奥尻町役場
1996『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町役場，奥尻.
奥尻町役場
2003『新　奥尻町史（下巻)』奥尻町役場，奥尻.
金井壽宏，楠見　孝
2012『実践知―エキスパートの知性―』有斐閣，東京.
河角直美，板谷直子，中谷友樹，佐藤弘隆，谷崎友紀，前田一馬
2017「記憶地図から読む地域の景観の歴史―仁和寺門前地域を例に―」『ランドスケープ研究』81(1)22-25.
木村圭司
2019「ArcMap による風のベクトル場表示」橋本雄一編『五訂版　GIS と地理空間情報― ArcGIS 10.7 と ArcGIS Pro2.3 の活用―』古今書院，東京，162-169.
佐々木馨
2004『北海道仏教史の研究』北海道大学図書刊行会，札幌.
佐々木理子，蟬塚咲衣，稲垣森太，手塚　薫
2019「記憶地図作成による地域情報の可視化―奥尻島谷地地区における事例―」『北海道民族学』15：45-54.

諏訪正凱
1986『いろはで綴る奥尻島今は昔』私家版，札幌.
蟬塚咲衣，佐々木理子，稲垣森太，手塚　薫
2019「北海道南西沖地震における奥尻島青苗言代主神社例祭の復興過程をめぐる考察― GIS による祭礼ルートと時間の変化が意味するもの―」『歴史都市防災論文集』13：163-170.
蟬塚咲衣，稲垣森太，手塚　薫
2020「地域課題に直面する奥尻島青苗言代主神社例祭とその対応」『歴史都市防災論文集』14：123-130.
高山正也
2008「日本における文書の保存と管理―現状のアーカイブズと図書館で，未来が拓けるか―」藤原良雄（編）『別冊『環』15　図書館・アーカイブズとは何か』藤原書店，東京，42-58.
田中雅一
2018「〈格子〉と〈波〉とナショナリズム―巨大な遺体安置所で Love Trip を聴きながら考えたこと―」『文化人類学』82(4)：425-445.
谷端　郷，板谷直子（牛谷直子），中谷友樹
2018「被災後の町の復興を支える神輿渡御―宮城県南三陸町保呂羽神社の春祭り―」『歴史都市防災論文集』12：193-200.
トゥアン，イーフー
1993　山本浩（訳）『空間の経験』筑摩書房，東京.
野中郁次郎，紺野　登
1999『知識経営のすすめ―ナレッジマネジメントとその時代―』筑摩書房，東京.
野中郁次郎，竹内弘高
2020『知識創造企業　新装版』東洋経済新報社，東京.
橋本裕之
2015『震災と芸能―地域再生の原動力―』追手門学院大学出版会，大阪.
福田　雄
2012「災禍の儀礼論に向けて―現代日本における慰霊祭や追悼式の事例から―」『関西学院大学先端社会研究所紀要』8：73-89.
藤岡謙二郎，浮田典良編
1975『離島診断』地人書房，東京.
矢野桂司，佐藤弘隆，河角直美

2017「市民参加型 GIS による祭礼景観の復原」若林芳樹，今井修，瀬戸寿一，西村雄一郎（編）『参加型 GIS の理論と応用―みんなで作り・使う地理空間情報―』古今書院，東京，118–124.

吉見俊哉

2017「なぜ，デジタルアーカイブなのか？―知識循環型社会の歴史意識―」『デジタルアーカイブ学会誌』1(1)：11–20.

レルフ，エドワード

1999　高野岳彦，阿部隆，石山美也子（訳）『場所の現象学―没場所性を越えて―』筑摩書房，東京.